

幼児の手話言語の獲得が 日本語の習得に与える影響について

武居 渡

(金沢大学 学校教育系)

内外の手話獲得研究より

- 前言語

手話諸語が出る前に手話の喃語が10カ月前後に観察される

- 語彙

1歳 手話初語 1歳半 手話2語文、語彙の爆発的増加

- 動詞の語形変化

2歳 屈折動詞を使用開始（過剰般化・誤用あり）

3歳 ほぼ正しく使用されるようになる

- CL

3歳 CLの使用が開始される（過剰般化・誤用あり）

6歳 CLシステムをほぼ獲得

- NMS

2歳 情動的表情の表出（手話の分離不可）

3歳 手話と表情の分離

（文法マーカ―、副詞、情動的意味の付加）

聞こえない子どもの
手話言語の獲得は
聞こえる子の音声言語の獲得と
きわめて類似している。

きこえない子どもたちにとっての 手話の意義

わかるコミュニケーションを可能にする

手話の力を使うことによって
日本語の読み書きの習得を促す

手話が自ら(の障害)を肯定的にとらえ、
聞こえる人と対等にやっていく原動力となる

きこえない子どもたちにとっての 手話の意義

わかるコミュニケーションを可能にする

手話の力を使うことによって
日本語の読み書きの習得を促す

手話が自ら(の障害)を肯定的にとらえ、
聞こえる人と対等にやっていく原動力となる

聞こえない子どもに対する これまでの国語指導

- 精読中心

段落に分けて、段落ごとに細かく読む
単語の意味理解に終始してしまうことも



学習者の意欲減退につながる



ここに手話を活用できないか

手話で内容を深めて 日本語につなげる

- 手話により子どもの負担を軽くする

意味・・・どんな内容が書かれていたか

形式・・・どんな日本語で書かれていたか

日本語が苦手な子どもは「どんな日本語で書かれていたか」の負担が大きく、読むことが困難になる。



手話を通して先に内容を与え、子どもの持っている力を「どんな日本語で書かれているか」に集中させる。

例) 小学校国語科教科書の手話翻訳ビデオ

※手話と日本語を鎖のように行き来する(チェーニング)

※最終的にはどれだけ日本語を読み、書くか。

多くの両親は聞こえない子どもに 手話言語環境を与えられない

○聞こえない子どもの90%は聞こえる両親から生まれる



家庭内で手話環境を提供できない！

手話で育てたい家庭に対する手話支援が必要！

どのように手話環境を提供するか

- ろう学校(ただし地方のろう学校は子どもの数が減少傾向)
- 放課後デイ(成人ろう者のスタッフとの出会い)
- トレーニングを受けたろう者(と通訳者)の家庭訪問支援
→ 行政の支援が求められる